

優秀賞

スペシャルワード・フォー・エブリワン

立教池袋中学校 三原 優翔

「おはよう！元気かい？」ある日僕が母と歩いていた時、遠くから八十歳位の男性が手を振った。母は一瞬きょとんとした顔をしたが、すぐに満面の笑みを浮かべ、大きく手を振り返した。僕が、「誰？」と聞くと、母は、「知らない人。でもきっとおばあちゃんのお友達。」と答え、僕は驚いた。知らない人に、そんな風に手を振るの？僕にはとても無理だ。その後そのおじいさんが近寄ってくると、母は「私、娘なんです。」と言った。するとおじいさんは「よく似ているから間違えちゃった。君はお孫さん？元気だね。」と言った。すると母は「皆さんよく間違えるから、いつも手を振り返しているんです。三十歳は違うんですけどね。」と冗談を言い、共に笑った。そして、「今日はお出かけです？風が強いからお気を付けて。」と母は声をかけ、別れた。何で初めて会った人とこんなに話すのか、僕は不思議に思い母に聞いてみた。すると母は、「手を振り返してもらえなかったら寂しいじゃない？万が一、人違いでも笑い話で済むし、挨拶をして嫌がる人はいないよ、きっと。」と言った。それ以降、そのおじいさんはうちの前を通るたび母と話し、僕も挨拶を交わすようになった。最初はおばあちゃんの友達。でも今は母とも僕とも知り合いで、この間は美味しいと評判のパンを買ってきてくれたりもした。何がきっかけで人とのつながりが生まれるかわからない。「縁」とは面白いものだ。

そんな中、僕は今年中学生になった。小学校の友達が一人もいない、新しい環境。四月の入学式は、正直期待よりも不安の方が大きく、翌日にはそれは何倍にも膨れ上がった。僕以外の生徒は元々知り合いがいるのか、もう既にみんなでわいわい話しているのだ。僕は「困った。誰とも話せない。」と思った。でもその時、母の言葉を思い出し、僕は隣の子に挨拶してみた。するとそこから会話が生まれ、お互いの共通点も見つかり、緊張していた心が少しほぐれた気がした。その日から、僕は色々な人と挨拶を通じて話すようになり、友達が少しずつ増えていった。沢山の友達と楽しく過ごしていたある朝、窓から入る光の中で、一人静かに下を向いて過ごす生徒の姿が目に入った。話しかけられたくないかな？迷惑かな？と色々考えたが、もしかしたら数日前の僕と同じ状況かもしれないと思い、勇気を振り絞って、「おはよう。一緒にこれやらない？」と声をかけてみた。彼は一瞬驚いた顔をしたが、「ああ、うん。」と答えた。そして、その後みんなと一緒に走り回って遊び、楽しい時間を過ごす事ができた。「おはよう」という言葉は、一番近い存在である家族と毎朝最初に交わす言葉でもあるが、まだ身近でない人との距離も縮められるスペシャルワードなのだと僕は感じ始めていた。

その挨拶の力をより一層強く感じたのは、通学途中に起きたある出来事だ。朝いつもの様に学校に向かってっていると、道路を掃除しているおばあさんがいた。その人の事は以前から見かけてはいたが、僕はいつもそのまま通り過ぎていた。でもその日は意を決して「おはようございます。」と声をかけてみた。するとその人は、「あら、おはよう。最近ここを通っている子だね。気を付けてね。」と返してくれた。たったそれだけの会話だったが、僕は「見守られている」と感じた。車通りの激しい道を通る僕の姿をこの人は気にかけてくれていたのかもしれない、そう思うと、地域の中で僕は一人ではないのだと安心できた。この様な地域のつながりを広げようとしているのが「社会を明るくする運動」である。

この運動は、犯罪や非行を防ぎ、罪を犯した人の立ち直りを支えるために、国民一人一人ができることを考える全国的な取り組みだ。今までニュース等でひどい事件を耳にすると、加害者を責めることばか

り考えてきたが、挨拶を通じて地域のつながりの大切さや温かさを感じた今、僕はまた違った視点を持つようになった。もし、誰からも挨拶されず、名前も呼ばれず、居場所を感じられない日々が続いたら、人はどんな気持ちになるだろう。孤独の中で怒りや諦めの感情に支配された時、その先に非行や犯罪が生まれてしまう可能性は否定できない。もちろん挨拶だけで全てが解決するわけではないが、その些細な行動が人々の距離を縮め、孤独な人を減らし、立ち直ろうとする誰かの支えになるのではないか。

あの日僕が勇気を出してかけた一言は、誰かのためであるだけでなく、自分自身の不安も和らげてくれた。挨拶が当たり前飛び交う教室、通学路になった時、僕達の学校や地域は今よりもっと安心して暮らせる場所になっているはずだ。

「おはよう。」このたった一言が、誰かの一日をそして世界を少しだけ明るくするかもしれない。僕はこれからもその一言をためらわずに届けられる自分であり続けたい。